モニター意見

「急務！市民のための科学とは何か」

向谷　光彦

「住民参加による・・・」の著者である小葉竹，片田先生らは，地域の防災，減災に，真摯に取り組んでおられると承知している。今回，住民参加という重い課題にもいろいろと苦心され，科学的証明，およびマイ・ハザードマップへ結実したことは大変興味深い。特に，四国にとって忘れることができない『S 51 小豆島災害』の記載があったことは，特別の感慨を持って読ませていただいた。このような取り組みに，多くの実務者，学者が共鳴し，展開されることを切望する。そして，具体的な成果を利活用できる論文への投稿，ディスカッションが活性化されることで，本学会の新たな価値観が創造されることを切望する。

島原市民の地域防災力に関するアンケート調査（木村，高橋他）を読んで

坪川　博彰

雲仙普賢岳の噴火終息宣言からまもなく 9 年が経過しようとしている。三宅島の全島避難は継続中だが，火山災害の深刻さはあまり世間の耳目を集めていない。その意味からも本調査は興味深く読ませていただいた。今回の調査結果にあるように，火山災害に対して住民が取りうる対策は避難というパッシブなものだけであり，望まれる対策がハード的なものに偏るというのは，基本的に火山災害が従来のソフト対策では対処しえない特性を持っているということに他ならない。火山災害は地震よりも長期にわたり被害が継続し，場合によっては原状回復が困難な状況になることも少なくない。雲仙普賢岳や有珠山のケースは火山災害としてはある意味で幸運なケースだったとも言えるだろう。

このような折，自然災害被災者の住宅再建支援制度の政府案が，衆院本会議で可決された。住宅の解体・撤去費など周辺整備に世帯あたり最高 200 万円を支給する内容だが知事会などが期待している住宅本体を再建するための費用は見送られることとなっている。被災者にむやみに資金をばら撒くだけというのは，自発的な防災力を向上させるインセンティブを損なうという問題があることはもちろんだが，災害によって罹災パターンは大きく違うのに，画一的な対策では被災者にとって納得のゆかない結果となることもあるだろう。本学会の特徴の一つは分野の異なる多様な自然災害の関係者が産官学を超えて集まっているところにある。会員の 1 人としては，本学会でこの問題について特集を組み，そこで多角的な議論が展開され，よりよい制度のための刺激を与えていただくことを期待したい。

「無題」

匿　　名

私はかわぐち氏の作品を見たことはありませんが，この記事の切り口は面白かったと思います。数字とデータ重視の学会のイメージからは少しかけ離れたと思いますが，私は良い傾向だと思います。

一作家の描く世界において，全てを肯定することはできないと考えますが，起こりうる可能性のある災害について，大なり小なり危機感を持っているのは誰もが同じでしょう。

3.4　「日本における危機管理」では，イラクの邦人誘拐事件でも報道されていましたが，日本人の危機意識は高いとは言えません。この記事にもあるように，自然災害について真剣になれないという意見にも同意できます。いくら研究者たちが成果を挙げても，建物を災害に強くできたりしても，ひとりひとりのソフト面が，それについていかなければ何もならないのは当然のことで，研究の進歩と共に個々の意識を高めていくことで，自然災害においても機能していくものだと考えます。

特集記事と巻頭言を読んで

長谷川雅俊

学会誌に漫画家との対談が載っているなんて。かわぐち氏の漫画はよく知らないが，「太陽の黙示録」を読んでみたいと思ってしまった。氏のファンは今号を欲しがるかもしれない。それほど，私の学会誌という“常識”から離れていた。災害科学の領域が“広い”あるいは“決まっていない”ことをまたも痛感させられた。残念なことはこの対談を含んでいる特集記事の意図が中途半端であると感じてしまったことだ。編集後記では当初予定の3／5しか掲載されていないと言う。ちょっと残念だった。もしできるならば，かわぐち氏との対談ででてきた“日本人の二面性“や”日本人の危機管理意識“が関東大震災後ではどうだったのかというような章を読んでみたかった。

巻頭言では災害という現実の場では起こりうる葛藤が生々しく記された。こういった“ローカル”なこと（例えば22巻2号の巻頭言も行政の立場からであった）の積み重ねから，防災に関する“一般原則”が抽出でき，防災減災に役立つのではないか。

モニターが最後なので気になったことを指摘。文献引用が人によっては上付き番号で，人によっては著者（年号）となっている。また，上付き番号の引用でも，文献1）や参考文献2）のような場合は数字が全角となっている。投稿規定を見ていないが，学会誌としては文献引用の記述を統一すべきであると思う。

特集記事「東京の壊滅と再生　1923－20XX」を読んで

飛田　哲男

関東大震災と聞くと遠い昔話のようにとらえていたが，まだたった80年しかたっていないということを再認識した。当時の被災状況を隅田川に架かる橋梁に注目してまとめられていたため，それを切り口に大震災の一面を知ることができた。溺死者の数が多かったというのは意外な感じがしたが，火の熱さから逃れるために心理的に隅田川の方へ向かったのだろうか。避難中に火流の方向に関する情報が得られないものだろうか。

かわぐちかいじ氏とのインタビューと「太陽の黙示録」を読んで「被災後のリアリティー」に関して考えさせられた。近い将来東京に大きな地震が来ると推測するにとどまらず，やはり政治家や専門家は「防災＝夏休みの宿題」を計画的にこなし，最悪のシナリオを考えて，東京が壊滅した後，数年後のことまで現実的に考えておくべきではないだろうか。このことを理解できる政治家が選出されるために，防災専門家が果たす役割と責任は大きい。

「速報」を読んで

川池　健司

速報記事の3件を興味深く読ませていただいた。なかでも，アルジェリア地震の援助活動報告はたいへん興味深かった。自分が土木工学の出身であるから自然災害についてもつい土木系の視点で捉えがちになってしまうが，本稿のように工学系や理学系以外の分野からみた災害報告は私にとっては新鮮であった。また，ある特定の分野にとらわれずにさまざまな分野から自然災害を学問的に捉えようとして，学会誌が編集されていることがわかった。

ただし，今回掲載された3件はいずれも災害発生から半年以上が経過しており，自然災害学会の学会誌で「速報」として取り扱うにはいささか速報性にかけるのではないかという印象をもった。